

## 《随想》

# 王朝随一の閨秀詩人

——齋院有智子内親王——

國 金 海 二

我が国の女流歌人の名を挙げてくださったさい、と質問すると、額田王・大伴坂上郎女・小野小町・和泉式部……とすぐに十指に余るであろう。

では漢詩人を、と問うとほとんどの人が答えに窮するにちがいない。

これは無理からぬことである。通常われわれが目にする「日本文学史」には女流漢詩人に関する記述がほとんど（まったく）ないからである。

しかし閨秀詩人が全くいないわけはなく、それに関心を持つ人誰もが指を屈するであろう詩人を挙げると、平安朝随一といわれる齋院の有智子内親王、幕末の代表的な詩人、江馬細香（大垣の人。生家で歴遊中の頼山陽と

出会い、互いに結婚を望んだが父の反対により断念。詩において師弟の関係を結び、以後、山陽の死まで添削を受けるなど大きく影響を受けた。詩集に『湘夢遺稿』。一七八七—一八六一）、梁川紅蘭（美濃の人。一七歳で再従兄弟にあたる詩人の梁川星巖に嫁ぎ、以来、夫婦で詩唱酬の旅をつづけることが多かった。また国事にも関心をもつとともに詩にも詠っており、安政の大獄ではあやうく刑死を免れている。詩集に『紅蘭小集』。一八〇四—一八七九）などであろう。

ここでは、詩集も残っておらず、わずかに『経国集』『雑言奉和』に九首が採録されているのみの内親王の一首を挙げて、その才媛ぶりの一端をみてみたい。

伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女を齋宮と言うのに対して、加茂神社に仕える皇女を齋院（いつきのみや）という。

その最初の皇女が、宮廷文化の中心と言われる嵯峨天皇（八〇九—八二三在位）の第八皇女として生まれた有智子（八〇七—八四七）である。四歳（十二歳とも）の時、卜定され加茂神社に奉仕することになった。

内親王については、史書にもほとんど記述はないが、弘仁十四年（八二三）春二月のある日のことを『続日本後記』（卷一七）には、おおむね次のように記されている。

この日、嵯峨天皇は齋院の花の宴に行幸され、供奉の文人たちに「春日山莊」を題とし

て詩を賦せしめた。その時、十七歳の内親王は、「塘・光・行・蒼」の四字の韻字を得て次の詩を読んだ。

春日山莊

春日の山莊

寂寂幽莊水樹裏

寂寂たる幽莊 水樹の裏

仙輿一降一池塘

仙輿一たび降る一池塘

栖林孤鳥識春沢

林に栖む孤鳥は春沢を識り

隱澗寒花見日光

澗に隠るる寒花は日光を見る

泉声近報初雷響

泉声近く報じて 初雷響き

山色高晴暮雨行

山色高く晴れて 暮雨行く

従此更知恩願渥

此より更に知る恩願の渥さを

生涯何以答穹蒼

生涯何を以てか穹蒼に答えん

〈訳〉春の日の山莊

ひっそりとした山莊は水辺をとり囲んだ

樹々の中にある。このたび、天子の輿が堤の

ほとりのこの山莊にお出ましになった。林のはぐれ鳥も春のごとき恵みを喜び、谷に隠れて咲いていた花も日の光を仰ぐことができた。

泉は春雷のように身近に響き、日暮れの雨も通りすぎて山上は晴れあがっている。

天子のお出ましによって、その恩沢のますます渥いことを感じたのである。生涯いかにしてこの高恩におこたえすることができようか。

天皇はこの詩に深く感嘆され、内親王に三品の位を授けるとともに次の詩を賜った。

書懷

懐いを書す

忝以文章著邦家

忝くも文章を以て邦家に著る

莫将荣楽負煙霞

榮楽を將て煙霞に負く莫かれ

即今永抱幽貞意

即今 永く幽貞の意を抱き

無事終須遣歲華

事無く 終に須らく歳華を遣るべし

さらに、文人を召す料として百戸分の封戸を賜った。

以上が記事である。

内親王の詩をみると、前聯の「栖林孤鳥識春沢 隱澗寒花見日光」が、眼前の景を詠じながら、寂しい齋院に日を送る自己を「孤鳥」と「寒花」に託し、天皇の行幸を「春沢」と「日光」に象徴させている詩才がとくにすばらしい。

『本朝一人一首』（わが国において、最初に日本漢詩の論評をした林鶯峰へ一六一八一—六八〇の著）に「尋常の墨客の及ぶ所に非ず。烏孫公主・班婕妤に擬すと雖も、恐らくは過論と為さざらんか。本朝女中無双の秀才なり」と評されているのも過褒ではないだろう。

また、江村北海（一七一三—一七八八）の『日本詩史』において、有智公主と名をあげ、「千歳の下をして嘆称已まざらしむ」と称揚しているのは、繰りかえし読むたびに首肯できる言である。